## 近代日本学者の神道論

-その系譜的一考察

### なぜ「日本学者の神道論」なのか

持っており、「一個の宗教としては、その信仰や宗教行事 を維持し布教する自由」を有していると述べた。そして、 型」において、「神道」は「国家神道」より広い意味を 報教育部宗教文化課編(文部省宗教研究会訳)『日本の宗教』 (国民教育普及会、昭和二十三年) の第六章 | 神道 GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)は総司令部民間情 多様な反応の綜合物であり、 世界の脅威になった。しかし、その中には単純な、ナ 織の中に織り込まれた切り離すことのできない「生活 ある。そして、その教義には、本来ならば国民が、 イーヴ の道」なのである。そのイデオロギーの或るものは 神道は、自然的環境と人間的環境に対する、人間の 、な、そして政治的に無害なイデオロギーも沢山 日本人の思想と習慣の組 -本質と ょ

> 佐 藤

さらに、 神道は日本人の「生活の道」であるとの見方を示し、 値あるように思われるものがかなりある。

Ł

する八百万の神々までいろいろある。そして、これら 神格化された祖先や英雄や皇帝や、天照大神を主神と の神とは、本質的にみると、木や狐や山の精をはじめ、 られている各種の神々に関係をもつている。即ち、こ 道は日本人の生活の一部であつたが、余り多くの外国 をもつ儀式や祭りを遵守することに中心を置いている。 の「神」の崇拝は、 い。一個の宗教としては、神道は、「カミ」として知 の影響を受けたので、それを定義することは容易でな 神道は、日本固有の宗教である。悠久の昔から、 地域的国家的な伝統と密接な関係

と指摘し、地域や国家の伝統と密接な関係を持つ祭儀を中

心にした、「日本固有の宗教」と捉えている。(1)

『日本の宗教』について、昭和二十四年に神社同攷会(鎌倉市)発行の神道界の言論誌『悠久』が「新刊紹介」を掲倉市)発行の神道界の言論誌『悠久』が「新刊紹介」を掲倉市)発行の神道界の言論誌『悠久』が「新刊紹介」を掲記、「日本人の宗教感情を占領下の短時日の間に是れ丈文参考書」から窺われるように、「日本のに足る読もの」と、「日本のたらな指向をも反省せしむるに足る読もの」と、会国民の徒らな指向をも反省せしむるに足る読もの」と、会国民の徒らな指向をも反省せしむるに足る読もの」と、の書書には、明治時代に活躍したイギリス人日本学者のな背景には、明治時代に活躍したイギリス人日本学者のる背景には、明治時代に活躍したイギリス人日本学者のる背景には、明治時代に活躍したイギリス人日本学者の本、日本の加藤玄智など、欧米と日本の研究者の長期に及る、鎌倉市、発行の神道界の言語は、原名と、の一様に対している。

ストン、サトウ、ホルトム、新渡戸稲造、加藤玄智ら、日 ストン、サトウ、ホルトム、新渡戸稲造、加藤玄智ら、日 地方の文化史家ロバート・〇・バーロウが一九四五年十月 リカの文化史家ロバート・〇・バーロウが一九四五年十月 リカの文化史家ロバート・〇・バーロウが一九四五年十月 中 と同じであり、同書が『日本の宗教』の記述、平成二年)と同じであり、同書が『日本の宗教』の記述、平成二年)と同じであり、同書が『日本の宗教』の記述、本への挑戦――アメリカ占領下の日本再生教育と天皇制』三交社、本への挑戦――アメリカら、日 では神道を「国家神道」「教派神とくに『日本の宗教』では神道を「国家神道」「教派神とくに『日本の宗教』では神道を「国家神道」「教派神とくに『日本の宗教』では神道を「国家神道」「教派神とくに『日本の宗教』では神道を「国家神道」「教派神とくに『日本の宗教』では神道を「国家神道」「教派神と

確認できるように思われる。 (4) 本アジア協会で活動した日本学者による研究成果の活用が

このような問題を考える契機を振り返ると、恩師の藤原 このような問題を考える契機を振り返ると、恩師の藤原 このような問題を考える契機を振り返ると、恩師の藤原 このような問題を考える契機を振り返ると、恩師の藤原 このような問題を考える契機を振り返ると、恩師の藤原 このような問題を考える契機を振り返ると、恩師の藤原

和十年五月。『続日本思想史研究』昭和十四年などに載録のる。成立期に関する先駆的業績に村岡典嗣「日本学る。成立期に関する先駆的業績に村岡典嗣「日本学、一年に明六社が結成された時期に求めることが出来、一日本学」の形成期は、明治五年に日本アジア協会、

がある。

- ②「日本学」は明治開化期から戦後を経て、「欧米人にとる日本人のための日本研究というイメージから、よる欧米人のための日本研究というイメージから、よる欧米人のための日本研究というイメージから、化」」する学問として成立した。
- ③チェンバレンは『古事記』解釈から明治における

を表明した。両者の認識の違いは、「英国風の経験 学」という方法論的相違にもあったと考えられる。 的実証的科学的本質」と「ドイツ文献学・文化史 理解」の視点が欠けているとして「反対」・「遺憾 岡典嗣は本居古典学における日本人の「国民精神の 新宗教 (忠君愛国教)の発明」説を展開したが、

④「日本学研究」の原点を志向する際、改めて「日本 学者・村岡典嗣」がクローズアップされる。

との最初であった。 だいた。これが「日本学者の神道論」について考察するこ H・チェンバレンと村岡思想史」 について報告させていた (平成十六年九月二十五日、東洋英和女学院大学大学院) で | B・ これを承けて、筆者は藤原氏の勧めにより第二回研究会

芸能」特集に、「加藤玄智の祭祀研究」に関する投稿依頼 会紀要』復刊第五十二号(平成二十七年十一月)の一祭礼と ナキャンパス)で報告を行うよう、大石泰夫代表より勧め をいただいたことである。いずれも有難いご配慮と感謝申 をいただいたことである。もう一つは、『明治聖徳記念学 俗の会第一回研究発表会(七月二十六日、岩手県立大学アイー 右に述べた近代の神道論に関する拙著 (錦正社、平成二十六年)をもとに、平成二十七年度岩手民 今回、あらためてこのテーマを取り上げる理由の一つは 『世界の中の神道』

版

チェンバレン、新渡戸稲造、アストン、 し上げたい そこで、これまで調査してきた日本学者の神道論のうち、

再検討してみたいと考えている。

## 二、日本アジア協会とチェンバレン『日本事物誌』

年)、マドラス(一八三〇年)、セイロン(一八四五年)、香 七八四年)、ロンドン(一八二三年)、ボンベイ(一八二九 究の二大基地であった。 Ostasiens)が発足している。両学会は外国人による日本研 ドイツ協会(Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde た。なお、翌年には在日ドイツ人による東アジア自然民俗 要 Transactions of the Asiatic Society of Japan を創刊し ジア協会(The Asiatic Society of Japan)を設立し、同会紀 査を実施した。一八七二年(明治五)には横浜に日本ア アジア協会を設立、政治経済活動に資するための民情調 港(一八四八年)、上海(一八五八年)の各地にロイアル 近代のイギリスはアジア進出と同調してベンガル(一

加藤玄智を中心に

ア協会を中心とした西洋人の日本研究の蓄積を背景にもっいレンは主著『日本事物誌』(Things Japanese: being notes on various subjects connected with Japan, 1890) について「場所の案内書というよりも、話題を扱った案内書」(初版序所の案内書というよりも、話題を扱った案内書」(初版序所)と述べている。つまり場所の案内書『日本旅行案内』に対し、話題の案内書『日本事物誌』という関係にあった。に対し、話題の案内書『日本事物誌』という関係にあった。

の十種に分類している。 物学」(Zoology)まで一二四項目である。楠家重敏氏は次物学」(Zoology)まで一二四項目である。楠家重敏氏は次項目は、アルファベット順に「算盤」(Abacus)から「動

①日本・日本語・文学(日本参考書、歴史と神話、詩歌

②地理・気候(アイヌ人、琉球、鉱泉など)

④宗教(神道、儒教、仏道など)

③社会制度(貴族、武士、

教育など)

⑤産業(貿易、船舶、鉄道など)

⑥動植物学(花、もぐさなど)

⑧風俗習慣(切腹、親孝行、結婚など)(⑦趣味(娯楽、食物、煙草など)

⑨美術(衣裳、鳥居、刀剣など)

⑩人物

(パークス、ペリー、シーボルトなど)

上の論文で、要点は次の部分であろう。(一九二七)に附録として収載した。日本語換算で三十枚以教の発明」を翌年単行本化し、『日本事物誌』第五版増補ところで、チェンバレンは一九一一年発表の論文「新宗ところで、チェンバレンは一九一一年発表の論文「新宗

天皇(ミカド)崇拝および日本崇拝[忠君愛国教] 天皇(ミカド)崇拝および日本崇拝[忠君愛国教] 天皇(ミカド)崇拝および日本崇拝[忠君愛国教] 天皇(ミカド)崇拝および日本崇拝[忠君愛国教]

で述べてきた見解に反対の立場をとる主要著作である」の末尾に「新渡戸稲造氏の『武士道―日本の魂』は、この項これは、第六版(一九三九)で「武士道」と改題され、

事の進行途中にある。 よって意識的に、あるいは半意識的に組立てられる工

心を新たにしたからである。これは新しいばかりでな

く、まだ完成していない。これはいまだに官僚階級に

一文が添えられた。

たといえる。り、欧米人中心の日本学の世界に一石を投ずるものであっり、欧米人中心の日本学の世界に一石を投ずるものであっ戸稲造の『武士道』は、チェンバレンが注目した作品であこのように、日本アジア協会のメンバーでもあった新渡

### 三、新渡戸稲造の神道論

り十耳前、払はドレギーの去学大家女ド・ラブレー九年十二月)に次のように述べている。 新渡戸稲造は『武士道』執筆の動機を、「序文」(一八九

被告の態度を取り得ることである。 (イン)かだか弁護士もしくは検事の立場であるに対し、私は

ことを記している。からを突き動かした背景に、西洋日本学者の存在があったからを突き動かした背景に、西洋日本学者の存在があったこのように新渡戸は、日本人による日本論執筆へとみず

明している。 (8) 教からの平静・沈着の影響に次いで、神道を次のように説教からの平静・沈着の影響に次いで、神道を次のように説 (3) で仏

- 尊敬、親への孝行を供給した。①神道はその教義に刻まれた主君への忠誠、祖先への
- のように清浄と信じている。②神道に原罪の教義はなく、人の心が本来善であり神
- 践方法で武士道に提供した。
  ③国土は祖先の霊の神聖な棲所であり、天の力と仁愛
  ③国土は祖先の霊の神聖な棲所であり、天の力と仁愛

る無言の前提をも言語化する」試みであった。この日本人説明することにより、日本人同士では当然自明とされていや大和魂」について「相手の外国人のコンテクストの中でティティーを主張したい気持」によるもので、「日本精神ティティーを主張したい気持」によるもので、「日本精神

性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士とに注目」している。

米国での講演を基にした『日本国民』(一九一二年)の神道の記述はさらに詳しく、歿後に出版された『日本文化の講義』(一九三六年)の神道論も基本的に『日本国民』を敷荷している。そこで『日本国民』第五章「宗教信念」の内容を便宜的に①~⑩の小見出しをもとに紹介すると次の通答を便宜的に①~⑪の小見出しをもとに紹介すると次の通答を便宜的に①~⑩の小見出しをもとに紹介すると次の通常の表情がある。

②芸術的・感情的気質 日本人は感受的でその信条を簡構成する。この意味で日本人は生来の宗教的民族といえる。ろ」であり、その実践(とくに礼拝行為)がその人の宗教を生涯の彼方における自己の存在について人の信ずるとこの宗教の定義 信仰とは未来・過去を問わず「この世の

を、その意識の奥底深くで感じている。潔に述べられないが、現世の存在は生の全体ではないこと

③神道の重要性 日本に芽生えまたは移植された宗教体 ③神道の重要性 日本に芽生えまたは移植された宗教体 「日城の原始本能を集めた束とよんでもよい」こと、そで「民族の原始本能を集めた束とよんでもよい」こと、そがら」とは「人間の本源的無邪気」のことで、「カミ」とがら」とは「人間の本源的無邪気」のことで、「カミ」とがら」とは「人間の本源的無邪気」のことで、「カミ」とがら」とは「人間の本源的無邪気」のことで、「カミ」とがら」とは「神道」が重要性。日本に芽生えまたは移植された宗教体で、「対している。

(⑤罪穢と禊祓 神道に原罪の教理はなく、ジョージ・(⑤罪穢と禊祓 神道に原罪の教理はなく、ジョージ・て清浄を回復する。

幽霊恐怖」とは異なるし、「東洋独自の弱点」でもない。前の善行を敬う。死者崇拝は起源がどうであれ「未開人の底祖先崇拝 死者がどこかで生きているというのが、民で清浄を回復する。

靖國神社は、

生者が国の為に死んだ人々を記念して建てた

祀られている。 もので、 彼らは不滅のものとされ、 民族の記憶の至聖 訴に

と感じる はそこにたたずむと自分が宇宙の広大な構成の一部である て簡素であり礼拝の条件を提供するにとどまるが、 信条を定式化せず各崇拝者に委ねる。 ⑦暗示の宗教 神道は 「内省による暗示の宗教」 神社の調度はきわめ 参拝者 であり、

ば神々の託宣として表現される。 徳の本質そのものを覆うものであり、 は心身の清浄である。「まこと」の語は道徳の全領域、 事細かな儀礼の主意は ⑧清めと誠 神道には教祖・神学・経典・ 「清め」であり、 神道の道徳はしばし 道徳的指令の要点 信条がない 道 が

重

凌いで、国土や旧いもの、自然の一つ一つの物への愛着を 教える宗教はない。 際的に身の清浄と勤勉を命ずるのみである。 権力と結託し、 ⑨自然崇拝 ⑩儒教・仏教 人間の脆弱や罪を認めない。 神道には理想への余地がなく、現存の王侯 神道が満たしえなかった知的・ 自然崇拝から発した民族宗教といえる。 しかし神道を 教えは全く実 精神的な

れる。

られ、 尊ぶ道徳性、自然崇拝、神仏関係史などの記述に久米およ 道 とも明瞭であり、日本人の感受性、生来の内なる善神の尊 しかしそれらの単純な引用で構成されているのではないこ びアストン『神道』(一九○五年)を随所に採りいれている。 すると、 (『開国五十年史』下巻、 ⑤以下では禊祓や神社の簡素な佇まい、 ④の「神ながら」の説明 明治四十一年)に示唆を得たと見 は久米邦武 清浄と誠 「神道と君

の転機となったことなどを併せて考えることが重要と思 戸傳の三本木原開拓の遺業を嘉賞され、 治天皇が明治九年・十四年の東北巡幸にあたり祖父・新 以外に、旧南部藩士新渡戸家の神祇を尊ぶ環境、 期に東京の神社で大教宣布の説教を聴いた経験があること それが農学志向 さらに明

度の で客死する五カ月前の昭和八年五月には、 で葬られたが、 もし他地で死亡の時は祖父傳翁のそばへ埋葬して呉れ た旧南部領三本木 祖父新渡戸傳は明治四年に歿し、 進講 の名誉に浴したことを太素塚 稲造は度々の外遊前後に墓参した。 (現青森県十和田市) 生前より墓域と定めて 0 の太素塚に神道式 昭和天皇への三 神域に奉告し、 カナダ

を保ち、

以上の記述について、新渡戸稲造が参照した文献に着目

「伝統と威信」によって人々を把握してきた。

い信仰に呑みこまれ生命力を失ったものの、

『面を儒教と仏教が担った。

仏教伝来とともに神道は新

儀式の枠組み

『武士道』

以

このような新渡戸稲造の神道観については、

既述

0

一貫して語り続けていることである。 祖先崇拝などについては、新渡戸稲造が

と言って持参のステッキで丸を画いたという。

咀み、 邸を会場に柳田 りぬ」との憂慮を抱いてのことであった。新渡戸の地方学(5) (5) ば明治維新、 ち地方の事象の顕微鏡的観察を提唱したのも、「回顧すれ で「『地方学』(Ruriology, Ruris田舎、Logos学問)」すなわ を」という「上英文武士道論書」を草した。『農業本論』 精神とを外邦に伝へ、以て国恩の万一に報い奉らんこと ともに、明治天皇に拝謁して英文『武士道』を献上し、そ で称賛してる。明治三十八年四月十二日にはメリー夫人とんとす」と述べ、その宿志を徳富蘇峰が『国民新聞』紙上 郷土会に受け継がれ、 壊敗し了らしめ、 自治制を布けるが如き、因つて以て従来の田舎社会を全然 べて此書を作る。庶幾くは、皇祖皇宗の遺訓と、武士道の の際「稲造短才薄識、 渥なるに報ひんとて、……余も亦始めて一身を農事に委せ 「農業本論」の「自序」に、「祖父の意思を継ぎ、 構想は明治四十三年より大正六年まで、小日向台町の自 明治天皇の巡幸を契機とした農学への精励につい 上は 従来の制度を種々刷新して、或は村落の分合を行ひ、 聖恩に背き、下は父祖に愧づ。唯僅に卑見を述 国是一変して、粋を英仏に汲み、華を米独に 国男・ 我が地方学の研究に一大錯雑を来すに至 さらには柳田の民俗学、 加ふるに病羸、宿志未だ成す所あら 小田内通敏が幹事となって催された 小田内の郷 皇恩の降 ては、

> 教育学へと発展したとされている。 土地理学、小野武夫の農村経済史研究、牧口常三郎の創

価

#### 1、アストン『神道』

は、古代の記録が少ないと述べている。 な立場で臨むべきだという。また、神道の資料について触 懷疑的」(negative or agnostic)ではなく「積極的」(positive) 十一年発行の『日本神道論』をもとに神道観を紹介したい 助訳『日本神道論』(明治書院、大正十一年)と、安田一郎 神道研究の代表作『神道』の邦訳には、補永茂助・芝野六 もに、明治時代のイギリス人三大日本学者に挙げられる。 アーネスト・サトウ、バジル・ホール・チェンバレンとと ウィリアム・ジョージ・アストン(一八四一~一九一一)は、 一方、「民間信仰と行事」 (the pooular beliefs and practices れた第一章では、『古事記』『日本書紀』などから、 |国家的宗教」(the State religion)であることが察しられる アストンは『神道』の序文で、神道の研究に「消極 『神道』(青土社、昭和六十三年)があり、ここでは大正 イギリス(北アイルランド出身)の外交官で日本学者の 神道は

人的抽象の表現が日本神話にはほとんどなく、自然物の創言語が著しく欠乏し、ギリシャやローマの神話のような擬

総論にあたる第二章から第四章では、

日本語には抽

上伐り申である産悳申でさえ、本原は中国哲学の会易なご造生成の勢力を擬人法にした伊邪那岐命・伊佐那美命や、

自然神と団体の中心人物とを先祖と称するのは、実の祖先とが大きく、人間崇拝の方が寧ろ僅かであり、人を神にす色が大きく、人間崇拝の方が寧ろ僅かであり、人を神にす生成の神である産霊神でさえ、本源は中国哲学の陰陽など

崇拝ではないと指摘している。

那岐命、 で歴代の朝廷にて行はれる神道の或る主要な儀式の始だと 時代の神の多くは、 られない。混沌の中から神が出現し、神世七代と呼ばれる ではいても、記紀旧事記の直接研究を外にしては決して得 いはれる」と指摘している。 重要な部分」であり、「光明と暗黒との神話に属するもの から始まる。また「天の岩戸」の物語は「日本神話中最も の神秘的な順序について注意している。第七代の神は伊佐 話の観念を十分得るには、重複や矛盾、曖昧なことを含ん (physical symbols) との見方を示している。日本の古い神 真実を暗示するもの」で、 神話を論じた第五章・第六章では、宗教的神話の比喩は 伊佐那美命の二神で、日本の神話は実はこの二神 農業国民に大に必要な、発生について 霊魂観 の「有形 的 表 象

る。

(The Sun-Goddess) すなわち天照大神が「神道中最も尊い神道の神々についての第七章・第八章では、「日の女神」

太古の日本人は甚だ不十分な又きれぎれな風俗の神」であり、なぜなら、

ると述べている。と、日本の太陽信仰が「農業国民」として自然なことであ

ついて触れ、その道徳的な面について次のように述べてい「日輪様」「お天道様」として擬人化したと神観念の展開にまた、天照大神の太陽的性質が不明瞭になり、日本人は

は五穀の種有用の食物を保存し又播種の法を彼等に示前から追放した。又其の人間を愛護する徳のあることなからずある。日の女神は其の悪戯な素盞嗚尊のことなからずある。日の女神の性質の中に道徳的要素が少で話した如く、日の女神の性質の中に道徳的要素が少で話した如く、日の女神の性質の中に道徳的要素が少で話した如く、日の女神の性質の中に道徳的要素が少

慈善心に富んで居られたことも肯かれる。 た時、神々人々のよろこんだのを見れば、日の女神がた時、神々人々のよろこんだのを見れば、日の女神がしたことによつて証せられる。又岩戸から出て来られ

区別がなかつた」と述べている。 同時に帝王でもあつた。人事と宗教的儀式との間に明かなう社会学の原理を紹介し、「天皇は最高の祭官でもあり、の段階に於ては、人事と神事とに幾んど区別が無い」といの投階に於ては、ハーバート・スペンサーの「社会進化の初第九章では、ハーバート・スペンサーの「社会進化の初

えている。

「神に対するのみならず人間仲間に対して行はれる」「重大たして、そのうちの「崇拝」(Worship)ついて触れている。」と、対人の「社会的尊敬の形式を借りたものであなくて之を新方面に応用したものである。神を拝むほとんだすべての形式は、社会的尊敬の形式を借りたものである。」と、対人の「社会的尊敬の形式を借りたものである。」と、対人の「社会的尊敬の形式を借りたものである。」と、対人の「社会的尊敬の形式を借りたものである。」と、対人の「社会的尊敬の形式と、等者に対する場別である。神を拝むほとんだすべての形式は、社会的尊敬の形式」を「新方面に応用したもの」と捉え、さらに「崇拝は人から人へ、又一時代したもの」と捉え、さらに「崇拝は人から人へ、又一時代したもの」と捉え、さらに「崇拝は人から人へ、又一時代したもの」と捉え、さらに「崇拝は人から人へ、又一時代したもの」と捉え、さらに「崇拝は人から人へ、又一時代して行はれる」「重大がら他の時代へ宗教的思想感情を通はす方法」であり、「神に対するのみならず人間仲間に対して行はれる」「重大などのである。

る起りは、死人の墓に飲食物を遣つた風習が起原である。「供物」の項ではハーバート・スペンサーの「供物をす

な職分」があるとも述べている。

あつたのでろうと思ふ」と述べ、その目的を次のように捉りは、報本反始の心を以て分けて置いた通常の肉の一片に意見が「其の宗教起原論と一致する」と言い、「供物の起かくて先祖の霊が神の資格に昇るにしたがつて、死人にとかくて先祖の霊が神の資格に昇るにしたがつて、死人にと

故に供物のことを償物ともいふのである。 はんがために供物をすることが甚だ多い。(祈年祭祝詞はんがために供物をすることが甚だ多い。(祈年祭祝詞はんがために供物をすることが甚だ多い。(祈年祭祝詞は、神に対する感謝である。

れる。 られる」という「国家的神道(国家神道)」の用例も注目さつてゐない。併し、太古には実際これがあつたことが察し

第十一章では、神道の道徳については古典にほとんど記

見えた国家的神道〔the State Shinto religion〕の一部とな

このほか、「人身御供〔Human sacrifices〕は、

古書に

のだが、「日本の実情に必要なしに作られるものでないこ義、官吏の精励、上下有礼、愛民」など中国思想に拠るもの心得を書いたもので、上下和合、仏法の尊信、君臣の信載がなく、聖徳太子の十七条憲法は、「内容はすべて官吏

る。 とは確かである。 本の実情の反映したものであることを推察している 不完全ながらも、 また、 日本における「罪」について次のように述べてい 罪を裁定したことが察しられる」と、 ……此の当時既に日本に不文律が有つて、

べての罪は宗教的不合格若くは責罰を含んで居る。 (②) 災を降すから、災難は神の怒つてゐる証拠と見る。 罪悪、 がつかなかつたのである。災難も罪の中に這入つてを 別なる種類の)とは、恐らく日本の上古に於ては区別 長〕の解釈によれば、神道の罪に三種ある。即ち不潔 拝者がかかる所為を避けるのを忌といふ。本居〔宣 神を怒らせる所為をば、 知る知らぬに拘はらず、罪を犯せば、神が怒つて 災難の三つ。儀式上の不潔と道徳的罪過 日本では罪といふ。 神の崇 す

仏のすぐれた力の加護によつて、災難を除くこと」と言つ について、「日本の辞書学者山田美妙は、まじなひは「神 が結合したものであるといい、第十三章では「まじなひ」 いては居るが、其の原理に於ては科学と同一のものであ なひは宗教よりも先きにあつたもので、過つた前提に基づ ……Sir Alfred Lyall 及び I. G. Frazer は、「この種のまじ て居るが、 第十二章では、「儀式」がこれまで見てきた崇拝の要素 チツメルンの説と実質に於て一致して居る。

> では次のように神道の特色を指摘している。 る」といふ説である。」と述べている。また「神憑 0) 項

を捉へたものと思はれる。 (31) 快なことをすれば、神も之を不愉快とするといふ真理 に進む階段を示すものである。我等が隣人に対して不 麗な観念である。生成の神なる産霊神は此の方向に更 此の神から生れたとして、一神教の方に道を開い ける立派な観念である。伊邪那岐命の神話は、諸神が 太陽から発する温暖と光明が人に対する慈愛であると うな事柄を記したものが無い。太陽を神とすることと いふことの承認とは、実に宗教を欠いてゐる世界に於 神道は不幸にして、託宣に存する真理を発見するや

れは日本人を説明する特徴である――の中に永久に生き残 方面にあらはれる神に対する日本人の活発な感受性 び習慣の中に生き残り、又更に単純で、且つ一層物質的な て神道はほとんど滅びた状態だが、「神道は日本の俗説及 きさについて指摘しています。近代以降、国民的宗教とし 特に近世に至っての影響が更に著しい」と仏教の影響の大 神道に接木した仏教の力である。支那の道徳、哲学の影響 頽の歴史である。尤も神道に生気の絶えざるゆゑんは第 るであらう」との言葉で本書は結んでいる。

第十四章では「仏教の興隆」について「後世の神道は

衰

54

える。 学研究の成果を評価し、活用していることなどが特色とい 寄せて観察していること、そして本居宣長や平田篤胤の国 道を農業国的宗教と捉えるとともに、 アストンの神道論は、 さらに新渡戸稲造や加藤玄智、 古代神道に関する考察をもとに神 G H 日本の民俗に関心を Qの神道観に顕

#### 五 明治聖徳記念学会設立と加藤玄智

著な影響を与えたことも重要であろう。

要旨は次のようになっている。(3) において「本会設立の急務」と題して講演しており、その べているのか確認しておきたい。 (一八七三~一九六五) が設立にいたる経緯をどのように述 明治聖徳記念学会について、 明治聖徳記念学会第一回研究会 理事・研究所長の加藤玄智 加藤は大正二年三月十七 (四谷・藤崎三郎助邸)

義ヲ宣揚シ」、「外ニ向ヒテハ……外人ヲシテ我国ノ真面目 想の本義』として公表した。「 精神教育と関係深い方面には通俗的に披瀝し、『我建国思 邦思想ノ唯一源泉タル神道ヲ科学的ニ正確ナル方法ヲ以テ ヲ遺憾ナク了解セシメ」ようとするものであった。著書を で一神道研 闡明スル 十年ほど日本宗教史研究に従事してきたが、 ノ必要ヲ感ジ」、最近二年にわたり東京帝国大学 究」を開講し、その成果を国民教育・陸海軍の 内ニ向ヒテハ忠君愛国 とくに 本 大

> ン・ランゲ・フロレンツ等の諸氏」による記紀・ 講演など、「宗教ニ縁遠キ」法律家や富豪の資財を投じて に由来している。欧米諸国ではギフォード講演やヒバー し「日本人ノ彼外人ニー籌ヲ輸スノ止ムヲ得ザルモノ」は 遂二日本人自ラ率先シテ」従事しなければならない。 知ルモノハ又畢竟自己ニ外ナラザルヲ以テ……日本研究 の事業を創めた理由もここにある。「蓋シ最モ能ク自己ヲ あるの実状」に遺憾を表明したことがある。私が独力でこ 勝さるものあるを出さんも未遽に測り知る可からざるもの て神道の科学的研究」への関心が高まり、 のほか、とくに日露戦争後には「武士道の研究と並び待ち 対し、欧米では 国大学すら尚ほ神道に関する一講座 寄贈する際の添書に、 「研究法」と「補助学科ノ最新知識」、「研究機関」の不備 「チエムバリン・アストン・サト 日本では 唯一 の設置だに無」 の最高学府たる我 やがて「邦人に 祝詞 i いのに しか ルボ 究

用シソノ宜ヲ得バ又以テ世道人心ノ向上ニ資スル所アル や講演を公表し、「以テ之ヲ国民思想ノ誘掖指導ノ上ニ応 われている。よって本会の事業が着実に成果を挙げて紀要 発起した「宗教学上ノ専門家ノ有益ナル講演」が盛んに行 可

明 研究の必要性を演説している。たとえば大正九年十 藤 はその後も、 L ば しば会の趣旨と 日 本 0 精 神文

キハ余ノ信ジテ疑ハザル所」である。

れた背景の一端を窺うことができる

Japanese Analects" (T.A.S.J. Vol.45, Part 1, 1917) 等の論文 想の本義』 とりわけ三つの点が重要と思われる。ひとつは Ame-no-minakanushi-no-Kami, Seen in the light of Today 戟があったことは間違いないであろう。 H かつて西洋人がサンスクリ を発表するなど、交流を深めていたこととも関連している (T.A.S.J. Vol.36, Part 1, 1908) · "On the Warongo or the Asiatic Society of Japan) 😢 "The Ancient Shinto Diety 日本アジア協会の理事を務め、 |本の仏教学者がイギリスやドイツに渡り ||西洋人の膝下 つまり設立の背景に、欧米人の日本・ や「本会設立の急務」の講演にみられるように、 ット語研究に先駆をつけたため 同会紀要(Transactions of これは加藤玄智 神道 研 究から 『我建国思 0

真の日本研究・紹介は日本人自身の手によらなければいけ真の日本研究・紹介は日本と可以、、予防線を張るべきだと考えていた。もうひとつは、英国人日本学者B・H・だと考えていた。もうひとつは、英国人日本学者B・H・だと考えていた。もうひとつは、英国人日本学者B・H・だと考えていた。もうひとつは、英国人日本学者B・H・だと考えていた。もうひとつは、英国人日本学者B・H・だと考えていた。もうひとつは、英国人日本学者B・H・だと考えていた。のと同様、に頭を下げて学びに行かなければならなかつた」のと同様、に頭を下げて学びに行かなければならなかつた」のと同様、に頭を下げて学びに行かなければならなかった」のと同様、

を疾呼して止まない所以である。 を疾呼して止まない所以である。

という提唱は、設立当時の明治聖徳記念学会が「会則」第欧米の動向をも視野に入れた日本人による科学的日本研究「忠君愛国説」・「神道」の研究を提唱している。こうした、と、「科学的方法」による日本の「宗教道徳」・「国体論」・

ないという使命感を抱いていた。さらに

彼我 本会ハ宗教学、 ルニ力ムルト同時ニ日本文明ノ真相ヲ欧米ニ紹介シテ テ本邦思想ノ特色ト我ガ建国精神ノ大本トヲ闡明シ我 保 美学、教育学等諸有人文史的学問 (ノ理会ニ資センコトヲ期 :ノ精華ト日東ノ文物トヲ内外ニ顕彰シ以テ自ラ知 神話学、 史学、社会学、 Ź ノ新研究ニ照シ 人類学、 法律

に置いているところに集約されている 想ノ特色ト我ガ建国精神ノ……闡明」および欧米への紹介 と定め、 会の目的を人文科学の「新研究」による「本邦思

以後、 次 彦・村上専精・南条文雄・ 学博士・文学士・法学士等)に井上哲次郎・井上円了・筧克 国婦人E・A・ゴードン 岡市之助・本郷房太郎・八代六郎など一四 田国男・土方久元など一〇名、 一名、官僚・貴族に徳川達孝・後藤新平・床次竹次郎・柳 同年十月以前の入会者は六八名で、研究者 月に四 ・芳賀矢一・白鳥庫吉・星野日子四郎 会員数については、大正二年三月(第一回研究会) 大正六年四月に三一〇名(含外国人四名)、 九一名 (同三名)、 (Elizabeth Anna Gordon) がいた。 十年三月に六七一名 姉崎正治・上田万年・三上参 陸海軍将官・佐官・尉官に ・長井真琴など二 名、 (文学博士・法 外国人に英 (同八名)、 大正九年 以降

れ、

年九月に五八九名 (同一二名)、 昭和五年二月に六二六名 (同二二名)、 昭和十二年六月に六二七名 (同一六名)、 昭 和 七

(同二二名)、 昭和十六年三月に六七一名 (同二五名) となっ

ている。

収支不足金は前年度の一〇三七円三〇銭五厘に八五五円 足になっている。 銭に対して支出が五三四円六七銭五厘と、 会計状況は、 大正三年度後期の収支は収入四九二円七九 以後も赤字運営が続き、大正五年度末の 四一円余りの不

以上の一四九一円九五銭五厘が前年度不足高の補塡に使 出身の実業家で南米貿易の先駆者として知られる藤崎三 中に行われた基本金募集においても、藤崎は一万円 (会費収入は八〇〇円)。また財団法人設立にあたり大正八年 たる二四 年度の経常費の支出総額三三五七円九銭五厘 助が寄附している。また財団法人に移行する前年、 ○銭を加え一八九二円四○銭五厘に達し、その全額を仙台 同年度経常費収入(支出と同額) 九八円八〇銭五厘は、 藤崎の寄附によってい 内訳の七割以上にあ のうち、 大正 四割 郎 わ 八

本人ノ姓氏ヲ冠スルコトアルヘシ」と定めており、すでに テ其ノ功労ヲ社会ニ表彰スルコトアルヘシ但シ本講演ニハ

十五年四月に七一一名 (同九名)、昭和三年二月に六八○名

Memorial Lectures)やヒバート講演 十周年を記念する講演会(静岡県立葵文庫)が、い 十月三十日の藤崎三郎助(六月十六日死去)を追悼する講演 芳郎が「戦時の欧米列強」を講じている。また大正十五年 大正六年四月二十二日の春季大会(東京帝国大学) 意識した趣向の一つであったと思われる。 したイギリスに 問題」、 崎講演」と称して開催し、 「藤崎講演」として執り行われた。これは加藤玄智が例示 (帝国鉄道協会講堂)、さらに昭和七年六月四日、 加藤玄智が「台湾人の宗教と内地人の宗教」、 おけるギフォ 当日は椎尾弁匡が「宗教の霊肉 1 (Hibbert Lectures) ド 記 念講 演 いずれも 創立二 を (Gifford 阪谷

違ふ、 事務所・研究所として提供するなど物心両面より事業推進 う自負があったようである 命とを体認し〔た〕」、民間における日本学会の創業者とい る一講座の設置だに無〔い〕」(「本邦の精神文明研究の急務」) に尽している。 して一千円以上を寄附し、東京市小石川区丸山町の自宅を 加藤自身も会の理事として寄附金集めに奔走し、 一象牙の塔、 而も御記念事業と云ふ高貴なる学会の聖業と使 加藤には、 エツクス・カテドラの講義とは余程 一帝国大学すら尚ほ神道に関す 個 人と

> 文なるかも、篤胤を非るものも、それ唯この成文なるかも 年) は、 加藤玄智の学問的真価が問われるのは本書であるとの思 告おこせて、次々に改めしめ給ひてよ。」を掲載している 徴』(巻一)の「 ら「本論」への間の余白頁(二〇頁)に、平田篤胤 を費やした約一四〇〇頁の大著である。本書の「序論」 てきた研究資料を「書物の形に整頓」しようと、 いかで此を見給はむ人々、己が過てる事を見出たらむには 京帝国大学を退官後、これまでノートに断片的に書き綴 藤玄智の 序で著者が述べているように、 『神道の宗教発達史的研究』 阿波禮、 篤胤を知るもの、 昭和八年三月に東 (中文館 それ唯この成 二年以 『古史 昭

からは更に神社神道と国 問的に神道は之を二大別して、 日本の国民的宗教であると考へるものである」と提起、 固有教である。特に国家的神道に至つては、古今一貫全く が示されているように感じられる。 う (一頁)。そして神社神道は内務省神社局の支配を受け、 両者とすることが出来る」とし、「 序で「神道は矢張り一種の宗教であつて、 「序論」の第一章「現存神道の二大部門」では、「学 体神道との両者に小 国家的神道と宗派的神道と 国家的神道は学問 それは日 別される」 本 O

0

記 其研究法に基づいて、爰に神道の起原及び発達を考察しよ であって、 うとするものである」(三頁)と述べている。 派的神道との包含する神道なるものは、固より一種の宗教 が出来る」という(二頁)。本書は「此の国家的神道と宗 国体神道と神社神道とを指示してをるものとも解すること る」とあるのは、「理と事との両方面に分けて、 玉 [体神道の精神で行われている。吉川惟足の **[体神道は教育の方面では文部省の監督に** 「天皇は神聖にして侵すべからず」とあるように政治も に「理は則ち天下の政道、事は則ち祭祀の神事に侍 此理由から、余は宗教学宗教史の立場を以て、 あ ŋ 『視吾堂の 余の所謂 帝

道は、 (三〇六頁) と付言している。また「国民的宗教」について 消滅して、 的倫理的な文明教期の神道に向上し来つても、決して全然 構成となっている。 自然教期即ち多神教期の神道」・「文明教期の神道」 「本論」は「初等自然教期即ち多霊教期の神道」・「高等 宗教史上に於ける国民的宗教 National Religion は Universal Religion に対立 神道が一たび高等自然教期の神道に発達し、 世の中から跡を絶つて仕舞ふものでは無い 自然教期の神道は初めは部族的宗教に出発し 則 加藤はこの中で、「初等自然教期の ち 普 して使用せられた述語であ 的 宗 教 World Religion or の 三 更に智 神 部

> ある。 (室) なに純乎たる国民的宗教であるのと同一で (室) なに純乎たる国民的宗教となつたのである。それ て、遂に純乎たる国民的宗教となつたのである。それ

と説明している。さらに、

髄中核とする国家的神道を展開し来つたのである。とを一貫して、神皇教を以て終始し、神皇教をその神らなかつたが、その代り、他国に類例を見ない万世一らなかつたが、その代り、他国に類例を見ない万世一中より醞醸した普遍的世界教は、之れを発生するに至安に日本に於ては、基督教の如きイスラエルの亡国民爰に日本に於ては、基督教の如きイスラエルの亡国民爰に日本に於ては、基督教の如きイスラエルの亡国民

産出し来つた」(九九五頁)と指摘する。そして、導原理に対して、神道は正直至誠と云ふ精神的指導原理を文明教期に於ては、仏基二教の慈悲と博愛と云ふ精神的指とし、「多神教の色彩が徹頭徹尾濃厚な神道の中に、その

代の天皇に現人神、 祖天照大御神を祭り、 神皇崇拝の神皇教に於て存する。 宗教である。而て古今神道の精髄は人間崇拝の一  $\mathbb{H}$ 国家的神道は、 本 Ö 基礎動き無く、 神道と云ふ日本が有する独特の宗教的事実の 現在日本に流布してをる其の 明津神たる神皇を拝して、 明治神宮を神孫に献じて、 神道茲に行はれる所以を思 伊勢の皇大神宮に皇 国 たる 民的

(性)とは骨に击している。 究明に学的努力を效さんことを期さなければならない。

勢からも窺えるように思われる。 (3) 加藤玄智の神道論は、長年の学的努力、とりわけ昭和期 加藤玄智の神道論は、長年の学的努力、とりわけ昭和期 と述べて本書を結んでいる。

第三部「神道発達の第三段階 諸神の融合帰一」第五節「神仏の接近融合と本地垂迹 このうち、岩手県の事例を扱った記述を取り上げると、 埋蔵 ちそれである。金色堂に安置してある仏像は弥陀、 藤原氏三代の遺骸をも礼拝することになるのである。 色堂に参詣してその諸天諸仏を拝礼する者は、 である。 教信仰と巧に融合した一事例に接することが出来るの つても、 「神本仏迹の本地垂迹」で、次のように述べている。 此 勢至の三尊及諸天像等である。然るにその堂下に 神道の自然教期から存在してをつた祖霊崇拝が仏 した所のものは、 |の如く日本を中心として考へる所の思潮の 基衡の遺骨である。 例之、 実は藤原氏三代の廟墓である。故に今この金 陸中国中尊寺の金色堂の如き場合は則 藤原氏三代の亡骸で、 故に金色堂は名は仏寺であ -文明教期の神道」第三章 藤原秀衡 とし

> 崇拝と仏教との結合した場合は無いと思ふ。 拝を為すことになるのである。是れ程能く日本の祖霊とせば、彼等はその仏天の拝礼と共に彼れ等祖霊の礼若しこの場合、藤原氏三代の子孫が金色堂に参拝した

さらに神社の起原の問題に及び、

想が、その起因を成してはをつても、 寺に於ける菅公の墳墓から、 のと云へよう。今又此の立脚地から考察すれば、 期の人間崇拝を醇化して、仏教信仰の中に止揚したも 拝との一種の結合であるとも見られる。是れ又自然教 ると云へる。……是れ又仏教信仰と日本固有の人間 た御影堂の如きは、何れも墳墓から発達した仏寺であ 墓たる金色堂や、東西本願寺の宗祖親鸞の木像を納 を一にして、彼の中尊寺の藤原氏三代の遺骨埋蔵 から発達した神社であることを述べたが、之れと帰趣 筑紫に薨じて、太宰府安楽寺の境内に葬り、 と論定した。その中で九州太宰府の天満宮は、 蓮等の墳墓から、 文芸と正義の守護神と迄発達し、 つた如きは、自然教期の死霊崇拝、その怨霊畏怖の思 して、〔森を起原とする以外に〕その一は墳墓に在 余は第二部第五章第四節に於て、神社の起原を研 日本の祖霊崇拝の信仰に陶冶された 太宰府天満宮が生成 天満宮には遂 その墳草

仏寺を発達せしめたのと、両々相対して、日本に於け 仏寺を発達せしめたのと、墳墓から神社へと発展していく過程について考察をめ と、墳墓から神社へと発展していく過程について考察をめ と、墳墓から神社へと発展していく過程について考察をめ と、墳墓から神社へと発展していく過程について考察をめ と、墳墓から神社へと発展していく過程について考察をめ でらしている。

八〇頁)として、その事例の一つに、神の信仰は、その侭之れを持続する訳にはいかない」(七神の信仰は、その侭之れを持続する訳にはいかない」(七節「性的陰陽神の倫理化と七福神の道徳的意義」において、また、同じく第三部第七章「祭祀に伴ふ淫風排除」第一また、同じく第三部第七章「祭祀に伴ふ淫風排除」第一

陽形は、松茸に変形さしてある。金勢様が、往時は陽形であつたが、之れに献る額絵の金勢様が、往時は陽形であつたが、之れに献る額絵の彼の有名な岩手県の巻堀神社の性的陰陽崇拝である

たもの」と捉えている。神体を、色々に変形して、進展して行く文化に順応せしめと、巻堀神社を事例の一つに取り上げ、「性的な陰陽石の

#### むすび

アストンの『神道』によって、古代神道を中心に歴史的にの『日本事物誌』に見られるような博物誌的な調査を経て、欧米人日本学者による日本・神道研究は、チェンバレン

# 図版について 図版について 常二篇本論・参照篇の表 加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』第二篇本論・参照篇の

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
-	-	_	—	-	-	_	_	_	-	_	-	-	-	-	—		-	_	_	部
-	-	_	-	-	-	_	_	_	_	_	-	-		-	-	_	-	_	_	章
二	=	=	_	=	二	=	=	=	=	=	=	二	=	=	_	二	二	=	_	節
伊豆熱海來宮の老楠	碓氷峠熊野神社神木科の木	北海道渡島のとちの木さん	京都八坂神社境内楠木神社	岩代国岩立山	大洗町魚來庵の石神像	紀州那智飛瀧神社	御蔵島のトシガミ	地神	備前下加茂の山神	木曾の山神	狩場明神	丹生明神	京都建仁寺蔵宗達筆風神及び	日光家光廟の風神及び雷神	板倉雷神	金村雷神	北野火雷神	天形星神社	伊豆大島三原神社	タイトル
熱海温泉の來宮神社・神木老楠	碓氷峠熊野神社神木科の木	神体樹木崇拝栃木さんの拝殿・御	昭和三年鳥羽正雄撮影	猪苗代湖畔岩立山	大正五年撮影	副島廣之写生境内全景、見取図、昭和九年	民族志』摘出伊豆御蔵島、本山桂川『海島	和六年撮影 山梨県八代郡高田村民家、昭	鳥羽正雄撮影山の神ずみさき様、昭和三年	澤巌撮影	同狩場明神	金剛峯寺蔵国宝丹生明神	国宝宗達筆風神・雷神	廟門風神·雷神	埼玉県熊谷町、護符	年撮影 茨城県下妻町、護符、昭和二	護符、縁起、津田敬武氏撮影	二郎撮影 千葉県柏町、昭和三年福田耕	男撮影山麓の鳥居、昭和八年石井辰	キャプション

38   37   36   35   34   33   32   31   30   29   28   27   26   25   24   23   22   21   №
-     - </td
二     二 </td
<t< td=""></t<>
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一
一       一       一       一       一       一       月       中       回       中       月       中       日       中       日       中       日       中       日       中       日       中       日       中       日       中       日       中       日
一     一     一     一     日       二     一     一     二     二     日       二     二     二     二     日<
一 一 一 一 一 二 部 章 節       一 一 一 二 伊豆中大見來       二 日 日 御 崎 龍 蛇 神 社 社 龍 蛇 神 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇 か こ こ こ こ
一       一       二       部章節         一       一       二       日 </td
一     一       一     一       二     二       日     世       日     中       日     日       日     日       日     日       日     日       日     日       日     日       日<
一     一       一     二       日     一       二     二       日     日       日<
-     -     -     部       -     -     -     章       -     -     -     章       -     -     -     章
一     一     部       一     一     章       二     二     節
一 二 伊豆河津來宮の
部 章 節 タイト
· .

58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	No.
_	_	_	_	_	-	_	_	_	_	-	_	-	-	_	_	-	-	_	部
四	三	三	三	Ξ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	Ξ	Ξ	三	章
																			節
ヌリデの木の粥掻棒	太平山神社霊獅像	呪符雑例	碓氷峠熊野神社の牛王	貧乏神	呪物蟹甲	アイヌの護符狐の頭骨	鳥扇	出羽善寶寺水難除護符	美保神社の波剪御幣	高野の波切不動護符	出雲御釜宮	箱根神社の神釜	奥州鹽竈神社の神釜	追儺の飛礫	茅輪	鹿島の要石	琉球ノロの首飾	ヤップ島酋の宝器	タイトル
製粥掻棒、大正十四年撮影信州伊那郡小野村ヌリデの木	像、田島隆純寄贈栃木県栃木町大平山神社御獅	一六四)掲載護符平出鏗次郎著東京風俗志(上、	木、昭和三年水澤不可止寄贈起請文用の紀州熊野牛王印版	祀社殿、明治四十五年撮影滋賀県木本町田部の稲荷神合	呪物用の蟹甲	文アイヌの守護神に就て参照宗教研究二―四、金田一京助論	鳥団扇、星野日子四郎寄贈大國魂神社李子祭に授与する	水難除護符出羽国西田川郡曹洞宗善寶寺	護符出雲国美保関神社波剪御幣の	紀州高野山波切不動の護符	武雄寄贈	箱根神社神寶の鐵釜	鹽竈神社境外摂社の神体塩釜	らひの飛礫、大正十三年撮影尾張稲沢駅国府宮追儺の鬼や	茅輪、大阪府住吉神社の茅輪岐阜県揖斐町郷社三輪神社の	鹿島神宮の要石、護符	福岡市在住 R. S. Spencer 寄贈	Japan Advertiser 紙所載、	キャプション

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	No.
_	_	_	-	_	_	_	_	_	_	_	-	_	_	_	_	部
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	章
																節
筑波山月水神社の女根石	の陰陽石 配外湯峯温泉玉置良平氏所蔵	シ 伊豫和霊神社のサイバンオロ	三河熱池の豊年祭供	田縣神社の藁人形	プリアポス神	足利市水使神社の扁額	岐阜県本郷村の山神々供	滋賀県滋賀村の山神々供	笠島の道祖神	御殿場在新築農家祝儀の飾物	同、良縁御守	熱田妙安寺の性神	ゴウルドベルグ氏の性神	常陸高道祖村道祖神	瀧宮陽石大神護符	タイトル
正十四年撮影神体女根石と旧祠と新祠、大	東屋旅館主人玉置良平撮影	にせるサイバンオロシ御田植の神事に於て陽根を手	熱池村八幡宮豊年祭行列	摄影 祭用、大正八年長谷川金次郎 尾張東春日井郡田縣神社祈年	O. A. Wall, Sex and Sex Worship, p. 437. 他	撮影奉納扁額、大正六年中澤澄男	形、大正元年林眞隆撮影小寺の山神の社へ奉献の男茎	五年撮影山神祭の松材陽形神供、昭和	影 の神輿と陽根形、昭和六年撮 宮城県名取郡笠島神社道祖神	<ul><li>一撮影</li><li>一撮影</li><li>一撮影</li><li>一撮影</li><li>一撮影</li></ul>	御神符包装紙	陽根神体、大正十一年撮影境内小祠道祖神、木及び木製	Goldberg, The Sacred Fire: the Story of Sex in Religion, p.42.	符陸筑紫郡高道祖村道祖神護	護符信州上田在瀧宮神社陽石大神	キャプション

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	No.
	=	_	_	_	-	_	-	_	_	_	_	_	_	_	-	_	部
四	=	Ŧī.	Ŧī.	Ŧī.	Ŧī.	五.	Ŧī.	四	四	四	四	四	四	四	四	四	章
																	節
山田長政戦艦図	胎児十ヶ月の各月守護神	平田篤胤の久延毘古真影	大直禰子神社	福島県月輪村の麓山神社火渡	橋本左内の筆	古代埃及人の死霊神判	台湾本島人の墳墓	千葉県野田町の道六神	疫病齋護符	伊豆長岡幸神女体石像	東京世田谷杓子稲荷の百日咳	御殿場の百日咳護符	木葉猿	体(古河辰)と扁額陸中槇(巻)堀神社金勢宮神	宮崎県小林町の陰陽石	伊豆大仁横瀬八幡神社の女陰	タイトル
戦艦図	間各月守護神隆陽漫録窃集所載の妊娠十月	古神影平田篤胤の自画自賛の久延比	殿、古図	正十五年撮影	橋本左内直筆	E. A. Wallis Budge, The Gods of the Egyptians.	台湾人即ち本島人の墓地	茂木林司撮影	与の護符(昭和二年)、他東京市小石川区の氷川神社附	大正七年八木昌平撮影長岡温泉路傍の幸神女体石像、	符名相荷神社の百日咳除の護	符に貼付する児童百日咳除の護御殿場東山地方の農家の戸口	木葉猿、昭和八年清水歸一撮影熊本県木葉町の疱瘡除の呪符	影 和五年筆写、扁額昭和六年撮 古河辰著東遊雑記巻八より昭	宮崎県小林町の陰陽石	大正六年大山柏公撮影 横瀬八幡社境内淡島様女陰石、	キャプション

108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	No.
		_							-		_	-	-	J-1		32	部
五.	五.	五	五.	五	五	五.	五	五.	五	五五	<u></u>	五.	五	五.	五	<u> </u>	章
四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	三	三	三	節
				_				_	_					_		_	即
本妙寺と加藤清正廟	山本忠告の墳墓	京都神龍社と卜部兼倶の塚墓	京都長尾天満宮と菅公衣裳塚	談山神社とその塚墓	久能山及び日光東照宮	能登の羽咋神社と塚墓	河内国譽田八幡社	応神天皇御陵	その発達	北海道の標木神社	同神社の標型	北海道の神籬神社	三輪神社	人柱源助	四尾連湖の牛頭供犠	諏訪神社の御頭祭	タイトル
正面、他熊本本妙寺清正公御廟前拝殿	六年図写 社々外地山本忠告之墓、昭和 山梨県巨摩郡西條村義清神	撮影 下部兼俱、昭和九年羽倉敬尚京都吉田神社末社龍神社祭神	宮、他宮、院境内長尾天満京都醍醐三宝院境内長尾天満	談山神社御廟山、他	久能山東照宮本社、他	別命墓、他能登羽咋町垂仁天皇皇子磐衝	河内国県社誉田八幡神社	皇陵、他国宝誉田宗廟縁起所載応神天	十勝本別中村神社	奉斎中村標木神社、明治三十三年中村標木神社、明治三十三年	立標型 北海道に現存せる神籬神社成	内神籬神社、昭和七年同氏撮影北海道十勝国本別村井英作邸	三輪山全景、大三輪神社拝殿	源助の供養塔、大正十年撮影出雲、松江大橋の一側、人柱	湖 犠牲を奉つて雨乞する四尾連 山梨県八代郡高田村民の牛の	大正十四年撮影 信州諏訪神社御頭祭鹿頭神供、	キャプション

127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	No.
三	Ξ	Ξ	三	三	三	三	三	111	三	Ξ	二	$\stackrel{-}{-}$				二	1	=	部
三	Ξ	三	三	三	三	三	三	三	Ξ	二	Ŧī.	五.	五.	五.	五.	Ŧī.	Ŧī.	Ŧī.	章
五.	Ŧī.	Ŧī.	四	三	三	三	=		二		八	八	七	六	六	四	四	四	節
中尊寺金色堂	奈良東大寺勧学院の僧形八幡	奈良県初瀬町與喜天満宮	陸前奏社	高野山嶽辯天	塩原新湯の温泉神社	紀州湯峯東光寺の湯花薬師像	福岡県長野水神社	駒門の富士の風穴	信州上諏訪島崎のユセン様	伊豆伊東の天狗詫状	上総一松神社の射占	古吉備津釜占	天神の守護疱瘡神逃避	越前松原村常宮の他屋	近江筑摩神社の神輿湖上渡御	宗吾霊像	大谷廟と東西本願寺	弘法大師廟と御影堂	タイトル
載秀衡遺骸二月二十二日『東京日日』所金色堂外観、仏像、昭和十年	快慶作(日本文化史巻六所載)	好古撮影  「脚対の古写真、昭和七年藤里 大陣古神像頭部、十一面観音	多賀城趾の奏社宮	所載和四年一月五日発行高野時報和四年一月五日発行高野時報	木県塩原新温泉神社	明撮影成形薬師像、昭和十年田中亮薬王山東光寺本尊湯花の天然	殿、他福岡県浮羽郡長野水分神社拝	建てられた風穴神社、他ラバトンネル入口に現今新に	ユセン様石龕、他	他豆伊東町妙昭寺蔵天狗詫状、	上総一宮町在一松神社の射占	諸国里人談挿図吉備津釜占	天神の守護疱瘡神を走らす	分娩室の内部、他越前敦賀郡松原村常宮の産屋	の水中渡御の図、昭和五年撮影墓地の不浄を忌避して琵琶湖	宗吾霊像	親鸞廟、他京都東大谷の大谷派本願寺の	高野山奥院弘法大師入定廟、他	キャプション

144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	No.
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	Ξ	三	部
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	六	六	六	三	章
_	_	_	-	_	_	_	-	_	-	_	_	_	_	_	_	Ŧī.	節
神像化せる聖天	伊豆下田港了仙寺の聖天	仙台土樋の聖天	雑誌大乗美術所載の聖天	沼津市女男神社神体と鴛鴦石	松茸 岩手県巻堀神社扁額おかめと	と神供岡山県倉敷町金山神社の神体	鎌倉八幡神社頭政子石	三河一宮村砥鹿神社陰陽秘石	金沢市兼六公園の陰陽石	琉球瀬長島の陰陽石	朝鮮附根堂神供	京都出雲路の幸神	葬列内の張子馬	尾張国府宮の竹製猪鶏	神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一神祭 一	本田善光	タイトル
所載 水原堯榮著邪教立川流の研究	歸一撮影 聖喜天の木像、昭和七年清水 了仙寺所蔵男女二体抱合の大	十三年三好愛吉寄贈仙台市土桶の聖天像、明治四	伝珍海己講筆大聖歓喜天	神社神体陰陽石、他靜岡県沼津丸子神社境内女男	昭和六年撮影岩手県巻堀神社奉納額の押絵、	大正十五年桐原葆見撮影金山神社新御本体木像男茎供、	鎌倉の八幡神社前の政子石	陰陽秘石、昭和九年撮影 砥鹿神社境内八幡神社前秘祀	兼六公園鶺領島の陰陽石	影に関係がある。 大正八年松村瞭撮 球球尻郡瀬長島に於ける性的	昭和六年今村鞆撮影朝鮮京城西大門刑務所所蔵、	目西出雲路幸神社境内陽根石京都市洛北寺町今出川上一丁	列、他大正十五年六月李王殿下の葬	猪·白鶏 尾張大國霊神社祈年祭奉献白	他尾張名所図会所載直会祭の図、	像信州善光寺開基御三卿三代之	キャプション

162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	No.
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	部
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	章
_	_	-	-	_	-	-	_	_	_	-	-	_	-	-	_	-	_	節
和歌山県海草郡山王社の瓦猿	熊本県木葉町の木葉猿	相模大磯町延台寺の虎御石	バタビヤの廃砲	長崎県彼杵町の祝石	石川県聖大寺町の石地蔵	箱根山中蘆湯附近の石地蔵	勢廟熊山上の石地蔵同坂部村石雲院の六地蔵と伊	静岡県金谷町の道楽地蔵	神足利市田原新一郎氏庭の道祖	視聴草に見える岐神	東京原宿の郷里神社	朝鮮の鬼神木	天下大将軍地下女将軍	テレスフォロス神	山形県笹野観音の削掛人形	田の神	像東京市上野不忍池聖天島の石	タイトル
年撮影中山文化研究所所蔵、昭和六	年撮影中山文化研究所所蔵、昭和六	虎御石板画	大正十五年宮坂光次撮影変形性的陰陽崇拝の対象廃砲、	スペンサ撮影に奉献せる火吹竹、昭和二年祝石(ホゲイシ)神及び同神	八年撮影石塊奉供、大正	石像地蔵尊、石製陽根奉供	大正十二年宮坂喆撮影、他六地蔵とその亀頭石柱及草鞋、	年児玉祖虔撮影	羽正雄撮影男女握手の石像、昭和七年鳥	神)夫婦二体像宮崎成身著視聴草所載岐神(幸	神社)大正四年岩田義信撮影東京市青山原宿郷里神社(榎	朝鮮の鬼神木	軍神像、他変形せる天下大将軍地下女将	Telesphoros, a Phallic Diety of Ancient Greece	昭和六年中山文化研究所撮影笹野観音堂頒布の削掛人形、	雑誌土俗と伝説所載の田の神	の石像東京市上野不忍池、聖天島内	キャプション

178	177	176	175	174	173	172	171	170	169		168	167	166	165	164	163	No.
三	三	Ξ	Ξ	Ξ	111	Ξ	Ξ	Ξ	Ξ		Ξ	Ξ	$\equiv$	Ξ	Ξ	Ξ	部
十	七	七	七	七	七	七	七	七	七		七	七	七	七	七	七	章
			=	=	_	_	-	-	_		_	-	-	_	_	-	節
銘。広島県鞆町沼名前神社石華表	和泉式部熊野神社奉幣	越中鵜坂の楉祭	近江の筑摩祭	越後浦佐毘沙門堂の堂押	宮負定雄輯陰陽石図	千葉県茂原町帝大明神	社の鉾 越前三国神社及び京都祇園神	神相州鎌倉小町本覚寺の祇園明	魔除の長鼻天狗		京都府宇治縣神社御幣	印度教のリンガ	佐渡新穂村東光院子王権現	甲斐高砂村傘地蔵	護符山形県笹野観音堂蘇民将来の	の護符の護符の蘇民将来	タイトル
石華表銘 広島県備後国鞆町沼名前神社	西国三十三所名所図会巻二和泉式部熊野本宮参詣の図、	昭和五年鵜坂神社寄贈、他	向ふ製の鍋を戴いて行列し神社に昭和五年近江筑摩祭に少女紙	他が一般である。 一様の毘沙門の堂押参向の図、北越雪譜所載、越後南魚沼郡	宮負定雄撰陰陽神石図	(石製陽根)、大正十年撮影新御神体(軸副)、旧御神体	祭礼に於ける幸神の矛	大正四年撮影	屋の鬼門魔除の長	東京市小石川区西原町理髪店	昭和三年撮影	室にて撮影大正四年東京帝大文学部標本	木製陽形、昭和七年撮影、他	<b>等</b> 一年十月号所载	大正十四年星野日子四郎撮影	大張光 大正十四年鳥居龍蔵、宮坂光	キャプション

彼らの学術交流の成果がGHQの神道理解にも及んだこと玄智ら邦人研究者の刺戟になったと考えられる。そして、も倫理精神的にも理解が深まり、それが新渡戸稲造や加藤

は冒頭に指摘した通りである。

る。 戦後における近代神道の研究は「政治史的イデオロギー 戦後における近代神道の研究は「政治史的イデオロギー の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の考察をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の表際をさらに深める上で、新渡戸稲造や加藤玄智が提唱 の表際をさらになると思われ

Ė

- 一二五~一二六頁。 会訳)『日本の宗教』(国民教育普及会、昭和二十三年)、会計)『日本の宗教』(国民教育普及会、昭和二十三年)、
- (3) 総司令部民間情報教育部宗教文化課編(文部省宗教研究(『悠久』二―一、昭和二十四年)、六四頁。(2)「新刊紹介『日本の宗教』民間情報教育部宗教文化課編
- (3) 総司令部民間情報教育部宗教文化課編(文部省宗教研究(3) 総司令部民間情報教育部宗教文化課編(文部省宗教研究
- (高梨健吉監修『完全版 日本事物誌』名著普及会、昭楠家重敏「B・H・チェンバレン『日本事物誌』の世界」

5

交社、一九九〇年)。

- 6 昭 チェンバレン著 和四十四年、 八七頁。 (高梨健吉訳) 『日本事物誌』 1 平凡社
- 7 新渡戸稲造著 全集』第一巻、 (矢内原忠雄訳) 『武士道』(『新渡 教文館、 昭和四 十四年)、 一七~一八頁。 戸稲
- 8 新渡戸稲造著 全集』第一巻)、三六~三七頁 (矢内原忠雄訳) 『武士道』 (『新渡戸稲 浩
- 9 平川祐弘 戸稲造の『武士道』」(『大手前大学人文科学部論集』 「西洋にさらされた日本人の自己主張 新渡 四
- 10 松隈俊子 平成十六年)。 八八頁。 『新渡戸稲造』(みすず書房) 昭 和四 + -四年)、
- 12 川合勇太郎『太素新渡戸傳翁』 十一年)、二八頁。新渡戸憲之『三本木原開拓誌考』 集』第十七巻)。 (新渡戸翁顕彰会、 昭 和

11

新渡戸稲造

(佐藤全弘訳)

『日本国民』

(『新

渡

稲

造全

- 13 年九月十八日)。 徳富蘇峰「農業本論を読む」(『国民新聞』、明治三十 間印刷所、 昭和六十三年)、一九七~二〇一頁。
- 14 鷗村訳『武士道』、丁末出版社、 新渡戸稲造「上英文武士道論書」(新渡戸稲造著、 明治四十一年所収 井
- 15 新渡戸稲造『農業本論』 一四一~二四二頁。 (『新渡戸稲造全集』 第二巻)、
- 16 岡谷公二『柳田国男の青 二五五~二六一頁。 春 (筑摩書房、 昭和五十二年)、
- 17 W G ・アストン著(補永茂助 (明治書院、大正十一年)、 · 芝野六助訳) 『日本神 一五七~一五八頁。

- 19 18 道論」、 W G ・アストン著 ・アストン著 一六九~一七〇頁。 (補永茂助・芝野六助 (補永茂助· 芝野六助 訳 日 日 1本神 本神
- 道論」、 W G ・アストン著 三〇七~三〇八頁。 (補永茂助・芝野六助訳) 日 1本神

20

二六七頁。

- 21 W G 四一九頁。 ・アストン著 (補永茂助·芝野六助 訳 日 本
- 22 明治聖徳記念学会は大正元年十一月三日に創立、 会し、二十八年明治神宮に献納された。加藤歿後十周年 月十五日財団法人設立登記を完了、昭和二十年に自然休 九
- 四巻) ~六年四月 目録』 し」会報に代えて会員配布したもの)は昭和十四年二月 年二月の各発行分、 徳記念学会事務局)所蔵 なお本稿で参照した機関誌・会報類は明治神宮 誌・会報および加藤玄智 称し再発足している。これらの沿革については各機 母体)、六十三年十一月、 智博士記念学会が発足し(戦後加藤が主宰した藤玄会が にあたる五十年五月、明治神宮内に事務所を置く加藤玄 〜十八年四月発行分である。また拙著『明治聖徳論の研 『会報』は大正二年十月 (第二巻)、大正三年十一月 (明治神宮社務所、 (第六巻)、大正九年一月~昭和十七 『会況抄報』(「紙節約の国策に順 昭和二十八年、「序」)を参照。 『明治・大正・昭和 (管理) 資料であり、このうち 同会を明治聖徳記念学会と改 神道書籍 (明治聖

-加藤

智を中心に」)で既述している。

「近代の神道・日本研究と明治天皇論

明治神宮の神学』(国書刊行会、平成二十二年)

- (23) 加藤玄智「本会設立の急務」(『明治聖徳記念学会会報
- (財団法人明治聖徳記念学会『会報』、大正十年)。(4) 加藤玄智「本邦精神文明の研究と其世界的発表の急務」
- 年)、二七頁。(25) 加藤玄智『我建国思想の本義』(目黒書店、明治四十五
- (28) 加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』、九一四頁。年)、三五六~三五七頁。
- (2) 加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』、九九八頁。

30

- 学ぶ――戦後の著述を中心に――」)がある。(錦正社、平成二十六年。十二「加藤玄智の神道研究に加藤玄智の生祠研究については、拙著『世界の中の神道』
- 加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』、六三四頁。
- 加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』、六三八~六三九頁。

32

加藤玄智

『神道の宗教発達史的研究』、

七九三頁。

31

四二、平成二十二年)。 阪本是丸「「国家神道」研究の四〇年」(『日本思想史学』

34 33

#### (御嶽山御嶽神明社宮司